

## 負傷動物の主な症例 ～治療と経過～

長野県動物愛護センター

及川悦子 今村睦 斉藤富士雄 中村和夫

### 1. はじめに

当センターは、負傷した犬、ねこ等の動物の取扱要領に基づいて、保健所が収容した負傷動物の治療をおこなっている。

平成12年度の収容は、25頭、平成13年度は、14年1月末までに43頭の収容であった。収容された負傷動物は交通事故によるものが多く、中でも骨折がほとんどを占めている。

今回、負傷動物の治療をおこなってから約2年が経過し、ある程度の傾向がみられたので、特徴的な6症例を挙げ、報告する。

### 2. 症例

#### 症例1

犬 中型 雌 首輪有り 推定5才 体重 10kg 平成12年4月佐久保健所より収容

1) 搬入時の様子 意識がはっきりしていない。腰立たずうずくまっている。後躯麻痺。

2) 臨床検査 体温38.4 心拍数91回/分不整脈 呼吸数18回/分  
瞳孔反射なし 眼瞼反射あり 後肢の深部痛覚なし

全血検査

X線検査 第二腰椎横突起骨折、恥骨骨折

3) 治療 抗生剤(アピシリン) 止血剤(ビタミンK1)の投与

4) 経過 収容から1週間で意識がはっきりしてくる。後躯麻痺。排尿・排便の補助。  
床ずれの発生。予後不良と判断。

#### 症例2

猫 中型 雄 首輪無し 推定3才 体重 3.48kg 平成13年12月佐久保健所より収容

1) 搬入時の様子 鼻、口より出血。うずくまっている。

2) 臨床検査 体温35.1 心拍数180回/分 呼吸数24回/分

全血検査 血液生化学検査

ウイルス検査(猫白血病ウイルス、猫免疫不全ウイルス)陰性

X線検査 肺野に不透過な陰影 心陰影小さい 肝臓付近に液体の貯留

胸骨の亜脱臼 鼻腔内に液体の貯留

3) 治療 抗生剤(アピシリン)止血剤(ビタミンK1)腸管運動剤(塩酸メクロプラミド)

鎮痛剤(酒石酸ブトルファンール)消炎剤(プレドニゾロン)抗ウイルス剤(インターフェロン)投与  
搬入から5日間、静脈内輸液(乳酸リンゲル液)の実施。

4) 経過 6日目に食欲回復。自力で歩行可能。

#### 症例3

仔犬 雌 首輪なし 推定50日齢 体重 2.36kg 平成13年9月上田保健所より収容

1) 搬入時の様子 右前肢、上腕骨付近腫脹。疼痛あり。元気あり。

2) 臨床検査 体温39.5

X線検査 右上腕骨体部らせん骨折。

3) 治療 アルミ製の副子で外固定。非ステロイド系消炎鎮痛剤の投与。

4) 経過 4週間後、再びX線検査でほぼ骨化。センター子犬として避妊手術後、譲渡。

#### 症例4

犬 中型 雄 首輪あり 推定1才 体重 10.5kg 平成12年11月佐久保健所より収容

1) 搬入時の様子 首輪が首にくい込んでいる。首輪周囲の皮膚がもりあがっている。

2) 臨床検査 未実施

- 3)治療 首輪を切り取る。消毒、切開している部分を吸収糸で縫合。  
抗生物質(アンプシリン)の投与。
- 4)経過 5日間包帯の交換。搬入より15日目にほぼ治癒。去勢手術後、センター犬として、ふれあい活動に参加後、譲渡。

#### 症例5

猫 中型 雄 首輪なし 推定8才 体重 3.48kg 平成13年11月佐久保健所より収容

- 1)搬入時の様子 脱水。削瘦。左頸部、下顎部に裂傷、化膿。  
重度の歯肉炎。下顎のずれ。
- 2)臨床検査 全血検査 血液生化学検査  
ウイルス検査 猫免疫不全ウイルス(FIV)陽性  
X線検査 下顎の骨折
- 3)治療 創傷部の洗浄、消毒、縫合。抗生物質(アモキシシリン)の投与。
- 4)経過 翌日より食欲有。多飲、多尿。予後不良と判断。

#### 症例6

あひる 雄 年齢不明 体重 3.4kg 平成13年5月諏訪保健所より収容

- 1)搬入時の様子 右脚曲がっている。跛行。右脚に体重かけられない。
- 2)臨床検査 X線検査 右中足骨斜骨折
- 3)治療 外固定 冷却
- 4)経過 収容14日目に右脚に体重かけられるようになる。58日目にほぼ治癒。保健所に引継ぎ後、譲渡。

### 3.まとめ

当センターでは、飼い主が見つかるまでの一時的な応急処置をおこなっているが、飼い主に返還されたのは、犬で46例中7例(15.2%)、猫で21例中1例(4.8%)であった。また、治療後、当センターで譲渡した数は犬で10例(21.7%)、ねこで2例(9.5%)であった。また、犬で17例(37%)猫で1例(5%)あひるで1例、保健所より譲渡を行った。

収容された負傷動物の多くは骨折、脱臼などである。四肢の骨折であれば、視診でもわかるが、脊椎、胸腹部の打撲、内臓の損傷は、わかりずらく、X線検査等を必要とする場合が多く認められた。そのため、搬入にあたり、できるだけ動物を動かさず、安静に運ぶことや、衰弱しているものはブドウ糖液などの経口投与、保温に努めることが必要である。